

世親『五蘊論』の無為法について

——世親の真理観の変容——

莊 崑 木 (釈 大田)

1. はじめに

近年、世親の『五蘊論』のサンスクリットの写本が発見され、その校訂本が刊行された¹⁾。また、安慧釈『五蘊論広釈』のサンスクリット写本も同時に発見され、同テキストの校訂出版が待たれている²⁾。世親作とされる著作群において、『五蘊論』への直接の言及は見られないが、世親の作品の一つとして考察すること³⁾に大きな問題は見られず、意味のあることであろう。とくに近年『釈軌論』と『縁起経釈』の研究が進んでいるため、それらの研究成果をも踏まえて、『五蘊論』に示された世親の考えとその意図を検証することには重要な意義があると考えられる。本稿では、『五蘊論』にあるものの、『俱舍論』には見られない、「真如」を含めた「無為法」⁴⁾について、その思想的な特徴を、特に世親の大乘仏教への転向という一事に照らして検討を加えたい。

2. 『俱舍論』の三無為と『五蘊論』の四無為

世親は『俱舍論』の第一章「界品」において「無為法」を「虚空、抃滅、非抃滅」という三つに絞ってその定義を行った⁵⁾。この三無為説は有部のみではなく、他の部派にも採用されており、その成立は古いと考えられる。一方また世親は、『五蘊論』では、さらに「真如」⁶⁾を取り入れ、「四無為」⁷⁾の説を立てた。この四無為説は清弁の『中観心論』や『掌珍論』にも継承されている。

『五蘊論』で世親は、『俱舍論』の三無為説をよく纏め、その定義をより明確にしている。これに加えて世親は、大乘に転向したという伝承を裏づけるように、『五蘊論』では阿頼耶識説を導入した⁸⁾ほか、大乘の重要な真理概念の一つである「真如」もまたそこに取り入れたのである。三無為説から四無為の学説に移行したことで、有部の学説を後にしたと言えよう。この変容はまた、『瑜伽論』の「撰決抃分」において、明白に「真如」を無為法と規定することから影響を受け

(120)

世親『五蘊論』の無為法について（莊）

ていると考えられる。ただし、一方また世親の伝記によれば、世親は『十地経』を聞いて大乘に転向したと言われるが、かれは『俱舍論』の「世間品」において、縁起無為説を批判する言説を残している⁹⁾。それゆえ、後述のように、世親が果たして縁起を無為法とする『華嚴経』を全体的に受け入れたのかについては再考の余地があるであろう。

3. 「真如」無為の持つ意味——『釈軌論』の法無我との繋がり——

世親の『五蘊論』における「真如 tathatā」の無為法の定義はきわめて短い。チベット語訳から見ると、訳者は原文の dharmāṇām dharmatā（諸法法性 chos rnams kyi chos nyid）と dharmanairātmyam（法無我性 chos bdag med pa nyid）を並列して（dang）理解したようである。このような真如の定義がどこに由来するのかを探るのは、世親の大乘転向後の思想変容を理解する一助となる。その中でも、『瑜伽論』の「五事」説内の真如説と『釈軌論』の法無我説¹⁰⁾とは非常に重要な関連性を示している。

まず『瑜伽論』は、「本地分中間所成地」（卷十三）において、「五事」、「二空」、「二無我」を一連で挙げ、論じている¹¹⁾。この「聞所成地」の五事と二空と二無我の関係を考え合わせると、五事の中の「真如」は、二空内の法空性と二無我内の法無我性に通じると言える。世親は『縁起経釈』の「無明支」において、瑜伽行派の論説に言及していることを勘案すると¹²⁾、この「聞所成地」についても目を通していたと考えてよいであろう。さらにまた、これは恐らく『楞伽経』などの教義にも関連しているであろう。なぜなら、『釈軌論』はすでに「真如」の言葉を含む『楞伽経』の偈頌を引用しており¹³⁾、その関連の教義を世親が理解していたと考えられるからである。『釈軌論』はまた、『転有経』¹⁴⁾を引用して「諸法の法性」¹⁵⁾という句を提示している。『転有経』は、『瑜伽論』の「菩薩地」「真実義品」¹⁶⁾にも引かれ、考察が加えられている。さらにまた、『瑜伽論』「摂決択分」の菩薩地解釈において、「三性」とともに「五事」が主要なテーマとして詳論されている。真如についての世親の理解は、このように『瑜伽論』「本地分」菩薩地と「摂決択分」菩薩地の論議に従うものと考えられる¹⁷⁾。また「摂決択分」によると、「真如」は実性、諦性、無顛倒性、不顛倒性、無戲論界、無相界、法界、實際などを異名とする¹⁸⁾。このように、『五蘊論』の真如無為説は、『瑜伽論』、『楞伽経』、ならびに『解深密経』¹⁹⁾の流れに近いことが窺える。

4. 縁起と真如²⁰⁾

『華嚴經』「十無尽藏品」（卷二十一）第五の「聞（多聞）藏」は、「縁起」を無為法とする「六無為」説を挙げている²¹⁾。澄観の『華嚴經疏鈔』²²⁾はまた、この箇所を註釈する中で、従来の無為説を纏めている。そして「縁起」無為説については、その主張をもつ複数の学派名を列挙する。すなわち、分別論者、大衆部、一説部、鷄胤部、化地部、説出世部などである²³⁾。分別論者、化地部は上座部の支派であるが、一説部、鷄胤部、説出世部などは大衆部の支派と考えられる。これらの部派は有部系以外の上座部と大衆部がほぼ大半を占めていることから、縁起無為の主張はかなり流行っていたと言えよう。『華嚴經』における六無為説は、そこに独自性があるとしても、縁起無為という点は化地部などに近い。また真如に関しては、この『華嚴經』の六無為に含まれていないが、「十回向品」の「真如回向」においては、真如に関して詳細な定義が与えられている²⁴⁾。一方、『瑜伽論』の『菩薩地』などにも、真如に関する詳しい論議が現れる²⁵⁾。いずれも大乘一般に真如がその教義の中核を占めていることを例証している。この点は、『俱舍論』の中で「真如」の語が一度も用いられていないことに照らし、注目されよう。

前述のように、世親は『俱舍論』の「世間品」において縁起無為を批判しており、大乘に転向した後も、縁起を無為法に位置づけることはしなかった。一方また世親は、『五蘊論』においては真如を無為の一つに加え、四無為説を提示した。このように、大乘に転向した世親にとって、「真如」は、『菩薩地』等の初期瑜伽行派の教理に基づく、大乘教義の重要な核心の一つであったと見ることができる。

ただし世親は、『縁起経釈』の最終章において法性を論じているが²⁶⁾、縁起を無為と見ることはない。『五蘊論』や『三十頌』などにおいても、瑜伽行派の八無為や化地部の九無為、あるいは『華嚴經』の六無為説をそのまま鵜呑みにしてはいない。それは、真如を三つ（善法真如・不善法真如・無記法真如）に分けて立てるのが相応しいか、また禅定の特定の段階（不動、想受滅）を無為法に分類すべきかといった問題について、世親自らの教義理解が批判的に働いていたためと考えられる。

1) PSk (Li Xuezhong and Ernst Steinkellner [2008]). 漢訳の安慧作とされる『広五蘊論』（大正蔵 no. 1613, 地婆訶羅訳）には著者問題（『梵語仏典の研究Ⅲ 論書篇』372 頁、註

(122) 世親『五蘊論』の無為法について (莊)

- 330) が残されている。
- 2) Kramer [2008].
- 3) 室寺義仁氏は識などの問題について『縁起經釈』と『五蘊論』を考察し、両者の先後関係を論じた(室寺義仁 [2000; 2010]). この問題は、『縁起經釈』の「名色支」から見ると、同じ世親作の『五蘊論』が『縁起經釈』の名色に関する五蘊説の不備を補っているという関係もうかがえるため、その限りでは『五蘊論』を世親の『縁起經釈』以降の作品と位置づけることができる。
- 4) 「無為法」の研究に関して、水野弘元 [1997: 407-424] (「無為法について」) 参照。
- 5) 斎藤明他 [2011: 190-200] 参照。
- 6) [Pañcaskandhaka 原文] tathatā katamā/ yā dharmāṇāṃ dharmatā dharmanairātmyam// (Li and Steinkellner [2008: 19, 7])
 [漢訳] 云何真如。謂諸法法性。法無我性。(『大乘五蘊論』大正 vol. 31, 850a23)
 [チベット語訳] de bzhin nyid gang zhe na/ gang chos mams kyi chos nyid dang/ chos bdag med pa nyid do// (Phung po lnga'i rab tu byed pa, P si 17b5, D shi 16a5)
- 7) A 『俱舍論』の三無為: AKBh 3, 16-19, Chap. I; 玄奘訳 大正 vol. 29, 1c2-3, 11-12; 真諦訳 大正 vol. 29, 162b7-9; チベット語訳 P gu 29b2-3, D ku 28a3-4.
 B Pañcaskandhaka の四無為: Li and Steinkellner [2008: 18, 11-13]; 漢訳『大乘五蘊論』大正 vol. 31, 850a18-19; チベット語訳 Phung po lnga'i rab tu byed pa, P si 17b3, D shi 16a3.
- 8) 室寺義仁 [2000] 参照。
- 9) 楠本信道 [2007: 123-126] 参照。『俱舍論』における「餘部の諸師」(nikāyāntariyāḥ, AKBh 137, 15) とは、称友釈によると、「聖化地部」(āryamahīśāsakāḥ, AKVy 294, 3) になるが、『光記』や『宝疏』(仏教大系『俱舍論』二, 318 頁) などには、「分別論者」(分別説部、『婆沙論』卷二十三の説) および「大衆部」(『異部宗輪論』の説) など(の縁起無為説) とされている。
- 10) 堀内俊郎 [2009: 100-170].
- 11) 大正 vol. 30, 345b19-22. この箇所原文はすでに Schmithausen 氏によって公表され、さらに堀内俊郎 [2009: 123] に引用されて『釈軌論』との関連性が示されている。
- 12) 楠本信道 [2007: 236, fn. 702] 参照。『瑜伽論』と全く関連性のないことも論じられているが、徳慧の『縁起經釈広註』の言及により、瑜伽行派の無着の論説との関連性があったと考えられる。
- 13) 堀内俊郎 [2009: 17-26, 224-225, 265-267, 320-321, 354-356]. ここに引用される『楞伽經』の 151 偈他に真如 (tathatā) が論及されている。
- 14) 『転有經』に関しては、袴谷憲昭 [2001: 252-293], 江島恵教 [2003: 521-542] 等を参照。
- 15) 堀内俊郎 [2009: 145-152, 234-235, 332-333] 参照 (特に 332 頁の註 208)。
- 16) 「真実義品」の校訂および訳注研究は高橋晃一 [2005] に譲る。
- 17) 『瑜伽論』「菩薩地」の「真実義品」(卷三十六, 大正 vol. 30, 487b18-21) において、法無我と真如との関連が論じられる。
- 18) 『瑜伽論』卷七十二, 大正 vol. 30, 697b29-c2.
- 19) 袴谷憲昭 [2001: 665-688] 参照。とくに 677 頁には、『解深密經』を引用しているが、

ここの論議に近い。

- 20) 袴谷憲昭 [1989: 88-108] では、ちょうど「縁起と真如」というタイトルの考察が行われている。
- 21) 『八十華嚴』卷二十一，大正 vol. 10, 112b10-11. 「何等為無為法。所謂虚空・涅槃・数縁滅・非数縁滅・縁起・法性住。」
- 22) 『華嚴經疏鈔』第四冊，卷三十三，42-54 頁。
- 23) 『華嚴經疏鈔』第四冊，卷三十三，47 頁参照。「分別論者・大衆・一説・鷄胤・化地・説出世部，皆立十二縁起以為無為。彼意以其次第作縁，恒無雜乱故説為常。有仏無仏，此法自爾，名曰無為。」
- 24) 特に，大正 vol. 10, 163a1-164b2. 十回向の第八「真如回向」の旧来の註釈に関して，澄観の『華嚴經疏鈔』第五冊，卷三十九，39-84 頁参照。
- 25) 『瑜伽論』における「真如」の論議に関しては，別途に考察する必要がある。
- 26) 松田和信 [2005] 参照。

〈略号および参考文献〉

『俱舍論』関連の略語等，斎藤明他 [2011] 参照。

『華嚴經疏鈔』澄観著，十冊，台北華嚴蓮社印行（華嚴疏鈔編印会 1944 年原版の復刻）。

PSk *Vasubandhu's Pañcaskandhaka*. Ed. Li Xuezhong and Ernst Steinkellner. Beijing: China Tibetology Publishing House; Vienna: Austrian Academy of Science Press, 2008.

Kramer, Jowita [2008]. "On Sthiramati's Pancaskandhakavibhāṣa: A Preliminary Survey." *Sambhāṣā* 27, 149-171.

江島恵教 [2003] 『空と中観』春秋社。

楠本信道 [2007] 『俱舍論における世親の縁起観』平楽寺書店。

斎藤明他 [2011] 『俱舍論を中心とした五位七十五法の定義的用例集』山喜房佛書林。

高橋晃一 [2005] 『『菩薩地』「真実義品」から「摂決択分中菩薩地」への思想展開』山喜房佛書林。

塚本啓祥他 [1990] 『梵語仏典の研究Ⅲ 論書篇』平楽寺書店。

松田和信 [2005] 「ヴァスバンドゥにおける縁起の法性について」『佛教大学総合研究紀要別冊 仏教と自然』125-132。

水野弘元 [1997] 『水野弘元著作選集 2 仏教教理研究』春秋社。

袴谷憲昭 [1989] 『本覚思想批判』大蔵出版。

袴谷憲昭 [2001] 『唯識思想論考』大蔵出版。

堀内俊郎 [2009] 『世親の大乗仏説論——『釈軌論』第四章を中心に——』山喜房佛書林。

室寺義仁 [2000] 「ヴァスバンドゥによる『識』の理解——『五蘊論』を中心として——」『加藤純章博士還暦記念論集 アビダルマ仏教とインド思想』春秋社，167-180。

室寺義仁 [2010] 「ヴァスバンドゥの注意力 (*manaskāra*) 解釈」『インド論理学研究』I, 213-222。

〈キーワード〉 世親，『五蘊論』，『解深密経』，『瑜伽論』，無為法，縁起，真如
(東京大学大学院修了)